

◆シンポジウム

平成 24 年度シンポジウム 沖縄の里海（漁場保全を主とした漁村活性化）

1. 開催趣旨

最近、日本各地で里海づくりが進み、アジア太平洋でもSatoumiは広まりつつある。「里山」と類似した「里海」の概念について、シンポジウムの講演者の一人である九州大学の柳哲雄教授は、「人手をかけることで、生物生産性と生物多様性が高くなった海」と定義している。地先で美しい海（環境保全）と豊かな海（生産性向上）をめざす取組が里海づくりである。

日本の漁業者の数は急速に減り高齢化も進んでいる。このため、地域住民や市民の役割は大きくなっているが、里海づくりの主役は、あくまで海と最も密接に関わっている漁業者である。北は北海道の知床から南は石垣島まで、日本各地の里海を紹介することで、本土の里海を参考としつつ、沖縄のサンゴ礁保全と水産資源管理をめざし議論を行う。

2. 方法

平成 24 年 10 月 18 日、那覇市の水産会館 5 階大ホールで、平成 24 年度シンポジウムを開催した。

今回は、総合地球環境学研究所との共催で、午前の第 1 部「日本の里海」、午後の第 2 部「沖縄の里海」、第 3 部パネルディスカッションとして開催した。また、11 月に開催された全国豊かな海づくり大会のプレイベントとして実施した。

水産業改良普及センター 鹿熊 信一郎

第 1 部 日本の里海

佐藤哲（総合地球環境学研究所）「主催者あいさつ」

鹿熊信一郎（沖縄県）「シンポジウム開催趣旨説明」

柳哲雄（九州大学）「日生の里海創生」

佐藤哲（総合地球環境学研究所）「里海創生を支える知識基盤—地域環境知プロジェクトがめざすもの」

松田裕之（横浜国立大学）「知床世界自然遺産と里海」

家中茂（鳥取大学）「里海の多面的関与と多機能性」

第 2 部 沖縄の里海

（漁場保全を主とした漁村活性化）

大嶋洋行（沖縄県）「主催者あいさつ」

金城寛信（沖縄県）「豊かな海づくり大会について」

鹿熊信一郎（沖縄県）「里海づくりの課題と海洋保護区」

比嘉義視（恩納村漁協）「恩納村における里海運動」

與儀正（八重山漁協）「八重山におけるオニヒトデ対策」

上村真仁（WWF サンゴ礁保護研究センター）「白保でのサンゴ礁文化の継承と里海」

西原隆（沖縄産業計画）「海を保全するグリーンベルト」

大見謝辰男（沖縄県）「沖縄における赤土汚染とその対策の歴史」

第3部 パネルディスカッション
(パネリスト：第2部発表者6名)

3. 結果

62名の参加者があった。広範な話題についてよく整理された講演が行われ、パネルディスカッションでのフロアーとの議論も活発で、有意義なシンポジウムとなった。

水産業改良普及センターが担当した第2部「沖縄の里海」では、まず鹿熊より、里海の全般的な課題と海洋保護区による里海の水産資源管理が報告された。続いて、比嘉氏より恩納村漁協のサンゴ礁保全の取組、特に生協と連携してサンゴ礁を保全しながらモズクの販促を図る里海運動が報告された。

與儀氏は、漁業者が主体となってオニヒトデを駆除することによるサンゴ礁生物多様性保全について、上村氏は、主に白保における里海の文化的側面について報告した。

元浦添宜野湾漁協の職員だった西原氏は、グリーンベルトによる赤土対策について、長く水産業界にも協力して赤土汚染問題に取り組んできた大見謝氏は、赤土汚染とその対策の歴史について、包括的な報告を行った。



シンポジウム会場



比嘉氏



上村氏



與儀氏



西原氏



大見謝氏